

二十三番地

宮本百合子

青空文庫

暫く明いて居た裏の家へ到々人が来て仕舞った。

子供達の遊び場になつて居る広っぱに面して建つて居る家だから、別にどうと云う程の事もなさそうなものだけ共、やつぱり有難迷惑な、聞きたくもない兄弟喧嘩の泣声をきかされたり、うつかり垣根際^{ぎわ}に寄る事も遠慮しなけりやあならないしするから、裏が明いて居た内は家中の者がのうのうとして居た。

場末の御かげでかなり広い地所を取つて、めつたに引越し騒ぎなんかしない家が續いて居るので、ポツツと間にはさまつた斯う云う家が余計五月蠅^{うるさ}がられたり何かして居るのである。

貸すための家に出来て居るんだから人が借りるのに無理が有る

う筈もないけれども、なろう事ならあんまり下司張った家族が来ません様にと願って居る。

前に居た人達は、相当に教養があるもんだから、静かな落付きのある生活をして居たが、いつだったか奥さんのうかつで、這い初めの子が気発油をのんで死んだ事を新聞に出されたので、厭気が差したと見えて越して行ってしまった。

何でも学士だったとかで、そう云えばかなりな書籍なども置いてあつた様だ。

「今度来たのはどんな人なんだろうねえ。

と云い合つて居ると、男の子がいつの間にか偵察をして来て、

「孝ちゃんの家が又来た。」

と報告した。

「孝ちゃんの家が？」

まあそうなの、又来たの。

じゃあああの小つちやな女の子も居るの、
いやな顔をした親父さんも。

「うん、

何だか赤坊が二人ばかり殖えた様だ。

「まあそうかい。

一寸母様、孝ちゃんの家が来たんですってさ、
ほんとに可笑しいわ。

一体どうしたってんだろう。

私は一年程前まで居た「孝ちゃんの家」にくつついて居る種々な話を思い出して笑わずには居られなかった。

何でも夏だったと覚えて居る。

主人は勤めに、子供達は学校に行つてしまつて静かになつて居た孝ちゃんの家が急に大騒ぎになつた。

何だか彼んだか訳の分らない事を二色の金切声が叫びながら、ドツタンバツタンと云うすさまじさなので、水口で何かして居た女中達は皆足音をしのばせて垣根の隙——生垣だから不要心な位隙だらけになつて居る——からのぞくと、これはこれはまあ何と云う事だろう。

奥さんと、女中が唾^{いが}み合いの最中なのであつた。

ヒステリーらしい奥さんはギスバタして痩せて居るし女中の方は苦しうにまで肥って居る。

その二人が夢中になってやって居るのだから恐ろしいも恐ろしいが先ず可笑しさが先に立つ。

何とか怒鳴って奥さんが女中の髪の毛をむしると女中は齒をむいて奥さんの手と云わず顔と云わずバリバリ、バリバリと引つ掻く。

髪が解けてずった前髪からはモジャモジャな心が喰み出て居るし引きずって居る帯に足を取られては俵の様になって二人ともころがる。

四五度引っくり返っては起きなおり起きなおりして居る内に二

人とも疲れ切つてしまつてペタツと座つたまんま今度は、もう車夫の口論みたいな悪体の云い合いが始まつた。

「馬鹿。

間抜け。

は通り越して仕舞つて聞くにしのびない様な事を云つては時々思ひ出した様に打ったり引つかいたりして居たが到々奥さんが泣き声で、

「馬鹿、間抜け、おたんちん。

さつさと出て行け。

どんなにあやまつたつて置いてやるもんか。

さあ、

さ、さっさと出て御行きつてば。

と云うと、女中は手放しでオイオイ泣きながら、

「出て行くともね、

手、手をつついて居て下さいったって誰が居てやるもんか。

馬鹿馬鹿しい。

此処ば、ばかりにおてんとうさまが照るんじやあるまいし。

覚えてろ。

と云うなり奥さんを小突いて何か荷物でもまとめるつもりか向うの方へ行くと、奥さんは奥さんでヒヨロヒヨロしながら、

「出て行け出て行け。

とあとを追って行つた。

あきれはててまばたきもしずに見て居た女中達は、私共にその様子を話してきかせながら、

「女つて浅間しいものでございますねえ。

奥さまとも云われるお方がまあ何と云う事でございましょうねえ。

旦那様のお顔にもかかわりますのに。

あんな事をなさる奥様が東京にでも有るんでございましょうか。

と云つて居た。

眉をひそめながらも笑わずには居られなかった。

磐額の様な女がベソをかきながら悪口を云つて居る顔付を想像

するとたまらなくなる。

其の奥さんが又来たと云うので何と云う事はなし皆が可笑しがるのである。

「又あんな事がもちやがあるのでございましょうかねえ。

と、女中は、待たれると云う様な素振りをして居る。

二三日の間は、家内の片づけにせわしないと見えてバタバタと朝早くからその奥さんも働いて居たが、あらまし目鼻がつくと、小さい子供を膝に乗せて、投げ座りのまんま舟を漕いで居る様子などが、まばらな松の葉の間から、手に取る様に見えた。

「あの人は気が柔かくなつたと見えて居眠りばかりして居る。

長生きが出来ていいでしょう。

などどこっちの家では噂をして居る。

女中を一人と、親類の預りっ子か何か「清子」と云う十三四のが水仕事や何かはして居ると見えて、

「清子、何とかをして御くれ。」

と奥さんが大きな声を出すと、店屋の小僧が出す様な調子で、その清子と云うのが返事して居るのをきいて母等は、

「女中じゃあない様だが、」

ああ朝から晩まで使われ通しじゃあ育てっこありやあしないだろうにねえ。

可哀そうに。

と云ってみじめがって居るし、私なんか、あんまり立てつづけ

て「清子、清子」と云つて居るのを小耳にはさむと、小供の守位にして置けばいいのに、どんなにかひねっこびれた子になるだろうと思ひ思ひして居た。

一番総領が十三になる孝ちゃんと言ふ男の子で次が六つか七つの女の子、あとに同じ様な男だか女だか分らない小さいのが二人居るので、随分と朝晩はそうぞうしい。

上の子が、恐ろしい調子っぱずれな声を張りあげて唱歌らしいものを歌つて居ると、わきではこまかいのが玩具の引っぱりっこをして居る中に入つて奥さんが上気あがつて居たりするのを見ると気の毒になつてしまう。

家も今こそかなり皆育つて静かな時が多いのだけれ共、前には

あんな事もあったのだろうと思うと、愚智一つこぼさずに何でも彼んでも飲み込んで堪える母もなかなか大抵ではなかったらうとつくづく思う。

孝ちゃん、家の二番目の子が同じ小学校の一級違いだったので、一しきり垣根越しの交渉がすむと、

「正ちゃん。

と呼びながらグルツと表門の方へ廻って入って来る。クルツと顔から頭の丸い、瘡の強い様な一寸もお母さんには似て居ないらしい。

奥さんがずぼらなりをして居るのに、いつもその子は、きちつとした風をして居た。

ちよくちよく下の妹もつれて来た。

ちよんびりな髪をお下げに結んで、重みでぬけて行きそうなりボンなどをかけて、大きな袂の小ざっぱりとしたのを着せられて居る。

あんまりパキパキした子ではないけれ共小憎らしいと云う様なところの一寸もない子であつた。

兄達が毬投げなんかすると、木のかげや遠くの方にそれで行つたのを拾う役目を云いつかつて音なく満足してやって居るので、しおらしい感じを起させた。

私が出て行つて、何か云おうとすると、はにかんでさつさと逃げて行ってしまうので、一度も落ついて口をきいた事はなかった。

最う少しパーツとした処が有れば好いがと思わないでは無かつたが努めて打ち解けさせ様とする氣にもなれないで居た。

孝ちゃんの親父さんと云う人は何処かの銀行へ出て居るのだと子供達が云つて居るが、そんな人には似合わない、地味なしまつた生活をして居るらしかった。

頭の細長い様な、細い髪の毛を右から分けて、如何にも神経質らしい人だった。

すぐ目の先に百日紅の赤く咲いて居る縁側を、懐手のまま、所在なさそうにブラリブラリして居るのなどをチラリと見た事もある。

あんな痩せた体で、よくあれだけの人数を食わして行けると、

まるで自分に関係の無い事ではあるけれど、あんまりその人の痩せ方と、人数の多さの比が甚しいので、不思議に思った事もある。兎に角、見かけ通りに種々の事をゴツゴツと所理して行く人なので、私共の家のものがいやな思をした事も少くない。

隣なんかと、あんまり親しくつき合う事をしない私の家の風なので、まあどうでもいいわと思いつながらつい、

「ほんとうに妙な人だねえ。

と云う様な事をちよくちよくして居た。

其の二年程前から——前に孝ちゃんの家が裏に居た頃——一番上の弟が鶏を飼い始めて、春に二度目の雛を八羽ほどかえ孵させた。

初めての時の結果が大変悪かった上に、今度のが予想外によか

ったので、無邪気な飼主は宇頂天になって、何の餌をやるといいの、斯う云う天気の時はどうしてやらなければいけないのとさわいで居たが、どうしても鶏舎が狭すぎていけないからと云う事になった。

小屋を移すと云つても只オイソレとするのではなく、水排けがどう云う風になつてゐるかの、光線の射入が完全に出てなく風の強くあたる処はいけないのと云つて、到々自分共の遊び場になつて居る広っぱの隅に建てる事になった。

植木屋を呼んで、朝早くから指図をして、上から鳥の入らない様に張ると云つてせつせと、自分で、植木屋が地をならして居る傍で金網を編んで居た弟は、物臭い風付をして庭を歩いて居た隣

の主人が、しきりに自分達の方をのぞいて居るのに気がつき出した。

見ない様な振りをして見て居ると、此処で、植木屋が棒をたてる穴を掘ったり、小屋の木組みをしたりして居るのが如何にも氣になつてたまらないらしい。

それでも、弟は只嬉しいばかりで、そんな事に一向頓着なく仕事をかどらせて居ると、植木屋は二人で四本立てた棒から棒へ床を張り、隣へ面した方へドンドン裏板を打ち始めた。

ドシンドシンとはげしい金鎚の音のする毎に眉をよせて居た隣の主人堪え切れなくなつたと見えて、ズカズカとよつて来て、小さいと思つてか弟に種々垣根越しに云い出した。

彼れをもっと、此方に寄せた方がいいの、こうしなけりやあいけないのと、自分が建てる様に云うので、ムツとした弟は、いつも怒った時する様に心持顔を赤くしながら、

「エエ、エエ。」

と不得要領な返事を与えて置いて、自分の思う通りにズンズンさせて行つた。

「気味がよかつた。」

と、其の話が出ると今でもよく云うけれ共、ほんとうに、二人の男を意のままに働かして、

「坊っちゃん此処は、どうしましうな。」

其処の工合が悪い様ですが、何か好い工夫をなすつて下さい

な。

と云われながら、垣の外に理由のない干渉をする一人の鼻をくじいて行くまだ十五のポーツとした子の氣持を想うと、私まで胸がスウスウする様だ。

何にも、その子が私の大切な弟だからと云うのではないけれど、後で聞けば小屋のまとまりのつくまで殆ど半日、垣の隙から、こわらしい眼を光らせて睨んで居たと云う。此の事は家中の者が皆いやがった。

他人の家の仕事に嘴を入れて、いくら世話を焼いて居る者が子供だからと云つて、下らない批評などを加えると云う法はない。家を侮辱した事だとか何とか云つて居ると、二番目の角力の様な

体をした弟が、

「僕行つて云つてやりましようねお母様。

実にけしからん。

と頭を振つたり何かしていきりたつので、笑つてすんでしまひはしたけれ共、あんなじやあきつと銀行でも毛虫あつかいにされて居るのだろうと思うと、旦那様、お父さんと一角尊がつて居る家の者達が気の毒な様にもなつたりした。

極く明けつ放しな、こだわりのない生活をして居られる私共は、はたのしねくねした暮し振りを人一倍不快に感じるのです、どうしても裏の家を快活ないい気持など思う事が出来なかつた。

何より彼より、一番大まかで、寛容でなければならぬ筈の主

人が、重箱の隅ほじりなので、事実以上に種々思つて居た事が無いでもあるまいと正直なところ思う。

それでも奥さんがピリツとした人なら、するだけの事はうまく感じよくやってのけたかもしれないけれど、いつもいつも、

もうもう此ではやりきれない。

と云う様な根の抜けた目付をして居る様なので、子供はあばれ放題、下女は目の廻るほど呼び立てられて、悪口を絶やした事が無い。

どれだけの経済程度なのか知らないけれど、子供にあれだけの装をさせて置ける位なら、最う少し体の好いちんまりまとまった生活が出来そうなものだがと、思う事がちよくちよくあつたりし

た。

まるで、私の家族とは方面の違つた仕事をして居る人達なので、私共の家族が余程變つて見えたらしい。夕飯頃歸つて来ると、じきに小さい者を對手にふざけたり、唇の間から上手にフルートの様な音を出して皆を面白がらせたりして居る父親も注意を引いたには違ひないけれ共、いつでも、少くとも十六の目玉の黒点になつて、フツフツと煙を上げそうになつて居るのは、私であつた。

裏には、私位の女が居ないからとも云えるけれ共、到底私に想像出来ない好奇心を以て、一寸裏にさえ出れば、私の足の出し合から、唇の曲げ方まで注意して居て呉れる。

パサパサな髪を頭の後でポコツと丸めて、袴を穿いたなりで、

弟達と真赤になつて、毬投げをするかと思えば、すっかり日が落ちて、あたりがぼんやりするまで木の陰の遊動円木に腰をかけて夢中になつて物ものを読んで居たり、小さい子の前にしゃがんで、地面に木切れで何か書き書き真面目な顔をして話して居るのを見ると、どうしても、見ずには居られない様に感じられたらしい。殆ど一日居る学校などでは、あんまり人が多勢すぎたり、違った気持ばかりが集つて、遠慮で漸う無事に居ると云う様なのがいやなので、あんまり人とも一緒に喋らない様に出来るだけ静かな氣持を保つ様にして居るので、かなりゆとりのある自分の家の裏を、暮方本を読みながら足の向く方へ歩き廻つたり、連想の恐ろしくたくましい惻愴な小さい弟を相手に、そこいらに生えて居る菌きのこを

主人公にしたお話しをきかせたりするのは真に快い。

室内に座つて、頭ばかりいじめ勝なので、十日に一度位、汗の出るほど力の入る毬投げをやるのも、私のためには決して無駄ではないのである。

けれ共、絶えずのぞかれて居るのを知つて居ると、いくら私が平氣でも氣持の好いものではない。

どことなし斯ういやなものである。

その日の前五六日程大變氣をつめた仕事をして居たので、久し振りで、庭土を踏んで見ると、頸の固くなつたのも忘れるほど、空の色でも、土の肌でも美しく、明るく眼に映つた。

あっちこっち歩きながら、手足をどうにかして動かしたい様な

氣持になつて居た処へ、丁度一番上の弟が毬を持って来て誘つたので、すぐ私は草履を穿いて始めた。

一杯の力を入れて投げてよこす球を身構えて受け取る時、ひどい勢で掌に飛び込む拍子に中の空氣を急に追い出すパツと云う様なポツと云う様な音が出る様に互の氣が合つて来ると、口に云えないほど男性的な活氣が軀中に漲つて来る。

私は眼をキラキラ輝かせて、まるで燕の様に、私の頭の上を飛び去ろうとする球を高く飛び高つて捕えた時、今まですっかり忘れて居た裏の家の垣根越しに、

「君の姉さん上手いやねえ。

とひやかす様な子供の声が大きく聞えた。

見ると、垣根からズーツと越えて見える部屋の鴨居のすぐ際の処に孝ちゃんと女中が顔を並べてニヤニヤして居る。

一寸眉を寄せたきりで知らん顔をして居る私を、弟はチラツと見たなり返事もしずに投げてよこすので、私も受け答えをして居るうちに又気が入って、まるで二つの顔を忘れて居ると又孝ちゃんの声が、

「君ーッ。

と怒鳴るので頭を曲げて見ると、まださっきの処に前の様にして居る。

弟は気の毒らしい顔をした。

孝ちゃん許りなら子供の事だから何と云ったって、かまわない

けれ共、二十五六にもなった女まで一緒になつて、踏台か何かして、ああやつて居るんだと思うと腹が立つてたまらなくなつた。

ほんとにいやな女だと思つて、クルツと正面を向いて真面目な声で、

「そんな事をして居るものじゃありません。」と云つた。

何ぼ何でも気が差したと見えて女はすぐ顔を引き下してしまつた。

もうそれでいいのだから孝ちゃんに何にも云わなかつたけれ共、どうしたらあんな大きな図体をして気恥かしくもなくあんな事をやられたものだろうと、あきれ返つてしまつた。

そんな事々が皆奥さんの不始末の様に思えてならなかった。

鶏小屋が裏の家の近くになつてから段々一人前になつて来た雛が卵を生み始めたので、日に新らしいのが巢の中に少くとも六つ七つ位ずつのこされる様になつたので、家では殆ど卵を買うと云う必要がなくなつて居た。

都合の好い時などは古くから居る三羽の雌鳥と今度の六羽とで九つ位も生むので、いつの間にか孝ちゃんの親父さんが例の目で見てしまったらしく、どっからか早速三羽の生み鳥と一羽の旦那様をつれて来た。

孝ちゃんの親父さんが真似を始めたと云つて、鳥飼いに明るい弟は、面白がつて氣をつけて居た。

鳥が来てから鳥屋とやを作ったり、

「餌は米ばかり食うのかな。」

などと云って居るのを聞いて、

「あれじゃあ食い潰される。」

などと云って居た。

日曜を一日、孝ちゃんの助手で作らげた小屋には戸も何にもなくって、止り木と、床の張ってある丁度蓋のない石油箱の様なものでその三方を人間のくぐれそうな竹垣が取り巻いてある許りだった。

猫や犬の居ない国に行った様な、何ぼ何でもあんまり寛大すぎると、家の者は皆明かに生命の危険が迫って居る処に入れられな

ければならない鶏の若い家族を同情して居た。

それでも案外なもので、猫も犬も掛らなかつたらしいが、食物のせいか、あんまり運動が不足だったのか、幾日経つても卵の夕の字さえ生まないので親父さんの内命を受けて遊びに来た孝ちゃんがどうしたのだろうと、家の鳥博士にきき出した。

新らしい鳥屋に入つてそこに馴れるまでは卵は生まないとか、たまには泥鰌どじょうの骨を食べさせて、新らしい野菜をかかさない様にと教えてやったそうだけ共あんまり功はなかつたらしい。

段々庭の様子に馴れて来た鳥はせまい竹垣の中では辛棒が仕切れなくなつて大抵の時は、庭中にはねくり返つて、縁側が土だらけになつたり、食事をして居ると障子の棧の間から四つの首をそ

ろえて突出したりする様になったので、日暮れに鳥屋に追い込む時の騒と云ったら、まるで火事と地震が一度に始まった様であつた。

あんまり時間も早すぎるのだけれ共、あっちこっちと逃げ廻る鳥の早さに追いつけないので、二人の子供と女中と清子が裸足になつて、

「あらあら、そっちへ行きましたよ、

早くつかまえて下さい。

ああ、もう逃げちやつた、駄目じゃありませんか坊っちゃんは、

鳥が来ると、貴方の方で逃げ出すんだもの。

などと云つて馳け廻つて居る。

鶏の方で此方に飛んで来ると、キーキー悲鳴をあげて跳ね上つたり、多勢声をそろえてシツシツと云つたりするので、切角鳥屋に入ろうとするとはおどしつけられて、度を失つた鶏達は、女共に負けない鋭い声をたてながら木にとびついたり、垣根を越そうとしたりして、疲れて両方がヘトヘトになつた時分漸う鳥屋の止木に納まるのである。

その頃には鳥は大切明き盲になつてからの事である。その何とも云えない滑稽な芝居を遠くの方から眺めると、大小四人が鶏を相手に遊んで居る様である。

又、實際一日中追い立て追い立て仕事にいそがしい女中や清子

は、この位の公然な遊戯時間でも与えられなければ浮ぶ瀬もないわけである。

キーキー、コケコツコと云うすさまじい声が聞え出すと、家の者は、

「いよ、始りですかね。

などと云って笑った。

かなりの間は、恐ろしく不安な生活をさせられて居る鳥達もとうやら斯うやら息才で居たが、一羽大きな牝鶏がけんかの拍子に眼玉を突つかれたなり、生れもつかない目つかちになったと云う大事變が孝ちゃんの家中进行してしまった。

「入目をさせて、眼鏡を掛けりや一寸ごまかせますよ。

などと戯談を云つて居たが、その事があつて間もない時孝ちゃん
の妹が家に遊びに来た。

上の弟は、鳥にお菜をやりながら云い出した。

「君んとこの鶏が突つかれたつて。」

「ええそうなのよ。」

「どれがつついたの。」

「兄さんの。」

「兄さんのつて、どれ？」

小さい娘は、すかして見ようとして垣根際によつて行つたけれ
共分らなかつたと見えて、

「黄色い様な肥つたの。」

兄さんの鳥はひどい事ばかりするんですもの、

私いやんなっちゃうわ。

と云つて、年頃の娘でもする様に袂の先を高くあげて首をまげて居る。

何か考えて居ると見えて、薄い髭の罪のなく生えた口元をゆるめてニヤツイて居た弟は、

「めっかちになつたんじゃ困るやね。

あのね、今先ぐ家へ行つて、庭中さがして御覧、

きつと、その眼玉がおっこつて居るから。

それをよく洗つて入れてやればきつと元の様になる事うけ合
だ。

ね、

早く行ってさがして御覧。

と云うと、しばらく解せない様な顔をして居た娘は、決心がついた様に、

「ええ私さがして見るわ。

と云うなり袂を抱いて転がりそうにかけて帰った。

どうしてもなくなつた鶏の眼玉をさがし出さなければならいと思つた小さい子は、可哀そうに顔を真赤にして、木の根の凹凸の間から縁の下の埃の中までかきまぜて一粒の眼玉をあさつて居た。

弟は其れをだまつて見て居たらしい。

ややしばらくたつてからさがしあぐねた子が、

「見つからないわ。」

どうしちやつたんだろ、

私困っちゃうわ。

と鼻声になつて弟に訴ええると、

「ほんとにそりやあ困るな。」

そんなら何なんだろ、

きつと、こないだの晩の雨でながされちやつたんだよ。

きつと今頃は品川のお台場にのつてるよ。

何にしろもうだめだよ。

と真面目腐つて云つて居る。

「ほんとうにそうなのよきつと。」

と、到々あきらめて仕舞つたと云つて、子供の無邪気な一つ話になつて居る。

事實は、単純な只それだけの事であるけれ共二人の子供の氣持を考えると、話以上の面白さがある。

自分より小さい隣の児に対する弟の態度や何かがそろそろ男と云うものらしくなつて來た事などに氣付くと、頼もしい様な惜しい様な氣になつて、見なれた癖の中にいつも、新らしい事を発見したりするのは大抵そんな時であつた。

いつも、家と裏の家との仲介者の様な位置にある弟は、段々育つて來た批評眼で、まるで違つた二つの人間の群を興味深く見て

居たらしい。

最う此の上ないほど暑い八月の或る日、裏の主婦が、海水浴をする時用う様な水着一枚で、あけ放った座敷の真中に甲羅干しの亀の子の様に子供達とゾックリ背中を並べてねて居たのなどを見て来ると、弟はむきになつて、あんまりだらしないとか、見つともないとか云つていやがつた。

一体此処いら界限が学者町で、相当に落つきのある生活をして居る人が多く、したがつて、それ等の人達の娘だとか妻君だとか云う人で暇仕事に音楽などをする人が多いので、東京の音楽の盛な区の中に入つて居るとか云う事をきいた事があつた。

実際上手下手は抜きにして殆ど家並にその家人の趣味を代表し

た音が響いて居るので、孝ちゃんの家でもいつの間にか、昔流行った手風琴を鳴らし始めた。

どっか恐ろしくのぼーんとした大口を開いた様な音からして、あんまりいい感じは与えない上に、その主があのお祖父さんだと云うのだから又いい笑種にされてしまった。

一つの電気の下に集まって、毛脛をあぐらかいて、骨ごつな指を、ギゴチなく一イ、フウ、三イ、とたどらせて行く父親をかこむ子供達が、その強張った指と、時々思い出した様に、ジーブツ、ブーブーと響く音とから、大奇籍でも現れ出そうな眼差しで、二つならべた膝に両手を突張ってかしこまって居る。

その様子を想像するさえ可笑しいのを、弟が、身振り口真似で

云つてきかせるのだから笑わずには居られない。

私共だつて、一段上の趣味の高い完全な人から見ればそりやあ又可笑しい事だらけだろうけれ共、何から何まで吊合わない、まるで糸の工合の悪い操り人形の様な事々を見せられると、

あれがよくまあ平気で居られる。

と思わないわけには行かない。

まるで、風土文物の異つた封建時代の王国の様に、両家の子供をのぞいた外の者は、垣根一重を永劫崩れる事のない城壁の様にたのんで居ると云う風であつた。

けれ共子供はほんとに寛大な公平なものだと思ふが、親父さんに、

「おい又行くんか。」

と云われても何でも、

「ええそうなのよ、

父ちゃん。」

とか何とか実にスラスラと事を運んで、ケロツとした顔をして御飯に呼ばれるまでは遊んで行く。

大人もちよんびりでも心の隅にああ云う気持を持てたらさぞ愉快な事だろうと思われる。

普通の女同志のつき合の七面倒臭さに、同じ女ながら愛素をつかして居る私は、そう云う事を見ると、たまらなく羨しくなつて来て、

ああだつたらなあ。

とつい出て来るのである。

或る大變涼しい晩——もう秋の中頃がすぎて、フランネル一枚では風を引きそうな、星のこぼれそうな夜であつた。

八月に生れた赤坊を一番奥の部屋でねかしつけて居ると、どつかで、多勢の男の声が崩れる様に笑うのが耳のはたでやかましくやかましく聞えて来た。

蚊をあおぎながら乳をのませて居た母は、

「どこだろうねえ、

山村さんかい。

随分にぎやかなんだねえ、

これじゃあ赤ちゃんも寝つかれまい。

と云いながら、ワツワツとゆれる様な音を気にしだした。

わきで本を見ながらくるく叩いてやって居ただけ共、あんまりひどいので、蒸して来るのを心配しながら硝子を閉めたり戸を立てたりして、フト気をつけると、どうしても孝ちゃんの家の方向である。

いつも静かな山村さんは相変らず人も居ない様になって居るからてつきりそうだと注意すると、少くとも十人内外の人が酒機嫌で騒いで居るに違いない。

「孝ちゃんの家のよ、

どうしたんでしようあの騒は、

皆酔っぱらって居るんですよ。

随分いやあねえ。

と云って居ると、今度は余程可笑しい事があつたんだと見えて太い声が引き附けた様に浪を打って笑いこけると、その中に女のように細いそれでも男には違いないのと、低い低い地面を這う様なのが殊に目立ってきこえて、沢山の響の中でその二つがいつもかなり聞いい音程を作つて流れて行つた。

一方は痩せて髪を長く分けた二十代の男で、一方は三十五六の赤ら顔の男に違いない。

若い方は洋服で、太い声は和服のきつと幅広の帯をしめて居る

事が、声で想像されるのである。

しばらくすると、端唄や都々逸らしいものを唄い出して、それも一人や二人ならまだしも、その十人位が一時にやり出すのだから聾になりそうになる。

随分私共もおどけた事を云ったり仕たりして笑いこけるけれど、始終上品な洗練された滑稽と云う事を各々に気をつけて居るので、子供などに聞かせたくない様な文句を高々と叫んで居るのをきくと恥かしい様になって、種々な世の中の事に疑問を多く持ち出す年頃に近い弟などはどう云う気で聞くだろうかなどと思うと、手放しで、ああ云わせて置けない様な不安と、さてそうは云うもののどうする事も私には出来ないと思う力弱さで気がいら立って、

大きな声で叱らなければすまないと云う様な恥かしさのまじった憤りが湧き立つて来た。

窓の傍に立ったりじいっと部屋の中央に立ちはだかったりして険しい眼附をして一人でプンプンして居た。

母等も初めは、いかにも五月蠅そうに、

「何て事つたろうねえ。

とか、

「ほんとにまあ困りものだ。

などと云つて居たがじきもう何とも云わない様になつてしまったのが、余計私には物足りなくて、

「ねえ、お母様、

なんて云うんでしよう。

あんなに男達がさわいで、家の女達はどうして居るんでしようねえ。

だまつて見て居るんでしようか。

やかましい下等でほんとにいやになる。

と云ったりして、しきりに同意を求めなどした。

夜は、いつも私の何より尊い時間で夕食後から十一二時位までの間にその日一日の仕事の大半はされるのに、その夜は、濁声にかきみだされて、どうしてもしなければならぬ本を片手に持ちながら、とげとげしい、うるおいのない気持を抱えて家中を歩き廻った。

一体此処いらで、そう云う調子のさわぎをきく事はまれなので、私などは、蟻の足ほど短かい今日までの生涯の中初めてきいたさわがしさであつた。

それだから、多くの人達の感じるより多く深く動かされたのであろう。

男なんて随分下劣な事を平気で、云つたり仕たり出来る動物だなどとさえ思つた。

何か口を動かす物でも出たと見えて、少しの間しずまった折を見て自分の書斎に入つた私は、又じき今度は、前より十層倍もある様な声で、

「浅間山何とかがどうかして

こちやいとやせぬ

と怒鳴り出したので、漸う静かになったと思つた私の気持は、一たまりもなくめちやめちやにされてしまった。あんまりだと思つて涙が出そうになつて来た。

自分の子供だの細君だのを放つぽり出して、あんなにして居るんだらうと思うと、不断いやに落ついた様な、分別くさい顔をしてすまし込んで居るあの家の主人が、もうもう何とも云えないほど憎らしくなつてしまった。

人を憎むとか悪様あしざまに思うのは悪いと云つても、今などはどうしてもそうほか思ひ得ない。

腹を立て疲れて私が床に洩い顔をしながらついたのは彼此十一

時半頃であつたが、母の話では、何でも雨戸は明け放しで十二時過まで、ゴヤゴヤ云つて居たと云う。

毎日ある事ではないんだからと、翌日の朝は、幾分か静かな考えになつて居た。

多分月曜か火曜であつたと思うが午後から小雨がして、学校から歸つて来た頃は氣が重くて仕様がなかつた。

それに、昨夜の予定がすっかり狂つて、あんな事のために大切な一日分の仕事はずつて来たと云う事も不快で、今夜は、どんなにせわしなくても二日分の事を仕なければならないと、図書から借り出して来た厚い重い本を持って手をしびらして家にたどりついた。

夕食をすませるとすぐ部屋に入る。

苔の厚い庭土にしとしとと染み込む雨足だの、ポトーリポトーリと長閑^{のどか}らしく落ちる雨垂れの音などに気がまとめられて、手の手先から足の爪先まで張り切った力でまるで、我を忘れた気持で仕事をしつづけて居た。

嬉しさに胸がドキドキする様であつた。

八時半頃までまことに無事であつたところが又思いもかけず、昨夜の騒ぎが繰返され始めた。

けれ共、雨で四辺がしめつて居るのと、人数が割合に少ないのとで余程凌げなければ共、

「又か。

と云う様なぶべつした感情を押える事は出来なかった。

次の日遊びに來た女の子にきいて見ると、

「会津へ行くからなのよ。

と云う。

そうして見ると、銀行仲間を順繰りに呼んでは別れの騒をやつて居るのと分るが、そんならそうで、ああ馬鹿放題な事をしずともと思われる。

怒鳴らなけりやあ二度と此世で会われないと云つた人もないだらうのに氣の知れないにも法図がある。

このまことに驚くべき大饗宴が三日続いた最後の晩、弟は、押え切れない好奇心に誘われて到々垣見に出掛けた。

三十分ほど鶏舎のわきに立ち尽して帰つて来ると、堪らず可笑しい様な顔をして話し出した。

部屋の障子も襖も皆はずされて居て一杯に人がならんで居る。

孝ちゃんのお阿母さんが水をあびた様にズベズベしたなりをしてお酒を運んだり何かして居ると、女中と清子が、とりすました白粉をつけた顔をならべて酌をして居る。

縁側に転寝をして居るものや、庭を眺めて居るものや、妙に肩を落して何かうなつて居るものやら、玩具箱を引くり返した様にごちやごちやと種々な人間が集まつて居る。

「御馳走なんかくにありもしないのに、
皆はしやぎきつて居る。」

孝ちゃんの親父なんかヒヨロついて居たつけ。

などと弟はきかせた。

翌日は、夜が大変更けた故か孝ちゃんの一家の眼を覚ましたのはもう九時近くであつたので、学校の始業時間よりおくれて起きた女中が炊く御飯をたべて間に合う筈がない。

「困っちゃったなあ、

僕やだなあどうしよう。

おいお前何故早く起きないんだい、

おくれちゃったよ、

いいのかい。

と、女中を相手に孝ちゃんが泣声を立てて居るのがよく聞えた。

まだ小さい子供に、酒に魂を奪われた様子を見せ、下らない事に夜を更けさせたり過度の刺戟を与えたりして、学校の出来が良いの悪いの云う親の無理を思わないわけには行かない。

活動へ行くな、夜涼みに出るなと云つて居ながら、平気で倍も倍も悪い様な事をしなければならぬ様に、云う者からして仕向けて居る。

子供の教育などと云う事を形式的に、両方でちゃんとあらたまつて座つて居る時に限るとか、親自身で面白がつて居る時は子供に教える折でないとか云う様な調子が、あんまりはつきり分るのでいやになつて来る。不幸な子供達だと思ふ。

子供の時からそう云う事にならされた者達は、馬鹿騒ぎをする

事は何でも無い、酒を飲んで居る時は、あらいざらいの馬鹿根性をさらけ出していいものと思つて、ひどい間違つた考えを持たせられるのである。

そんな事は、きまりきつて居る事だけに余計危うく、みじめに感じられるのである。

そう斯うして居るうちに四五日は氣のつかない中に立つてしまつて、いそがしい仕事があつたので、それに追われて外にも出ずに居るうちに二十三番地——孝ちゃんの家は空家になつて居た。

鶏や何かをどうして行つたのだろう。

まさか背負つても行かれまいが、と思ひながら、珍らしい氣持がして、久し振りに誰はばかり事なく、すいた垣越しに、散らか

った埃の中の孝ちゃんの清書だの、閉^たて切った雨戸の外側に筆太く「馬鹿」と書いてあるのをながめて居た。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第二十九卷」新日本出版社

1981（昭和56）年12月25日初版

1986（昭和61）年3月20日第5刷

初出：「宮本百合子全集 第二十九卷」新日本出版社

1981（昭和56）年12月25日初版

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2008年9月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二十三番地

宮本百合子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>